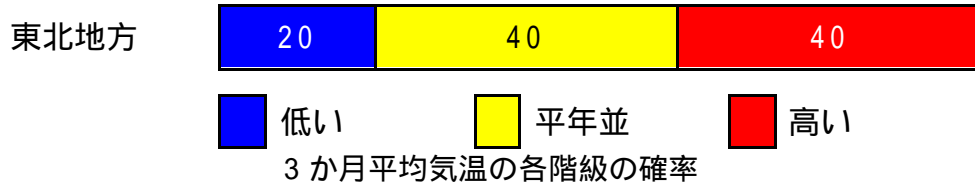


# 東北地方 3 か月予報（9～11 月）の解説

平成 13 年 8 月 20 日 仙台管区气象台

## 1. 予想される天候

（1）3 か月平均気温の予想される各階級の確率（％）



〔概要〕

9～11 月の 3 か月平均気温は「平年並」か「高い」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ 40％です。「低い」の可能性は小さく、その確率は 20％です。

（2）可能性の大きな天候の特徴

9 月：天気は概ね数日の周期で変わりますが、秋雨前線の影響で天気のぐずつく時期があるでしょう。前半を中心に太平洋高気圧に覆われ残暑の厳しい日がある見込みです。

気温は高く、降水量は平年並でしょう。

10 月：天気は数日の周期で変わり、平年と同様に移動性高気圧に覆われて晴れの日が多いでしょう。

気温は高く、降水量は平年並でしょう。

11 月：天気は数日の周期で変わりますが、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となって、平年と同様に東北日本海側では曇りや雨の日が多く、東北太平洋側では晴れの日が多いでしょう。

気温、降水量共に平年並でしょう。

なお、9～11 月の 3 か月間の降水量は平年並でしょう。

## 2. 前回（7 月 23 日）発表の 3 か月予報からの変更点

10 月 気温 平年並 高い

< 参考資料 >

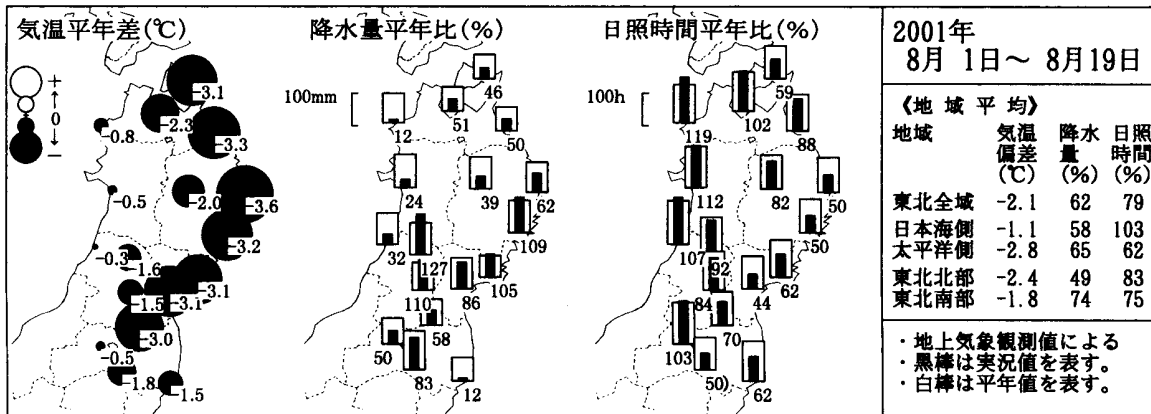
平年のおおよその天気出現日数（日）

	9 月		10 月		11 月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	14	13	15	18	9	18
雨の日	13	12	13	9	16	8

注：季節予報では、「日照率 40％以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」をそれぞれ晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。なお、日照率は 1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

### 3. 最近の天候経過と循環場の特徴

#### (1) 最近の天候経過



東北地方における 8 月（1～19 日まで）の平均気温、降水量、日照時間平年差（比）

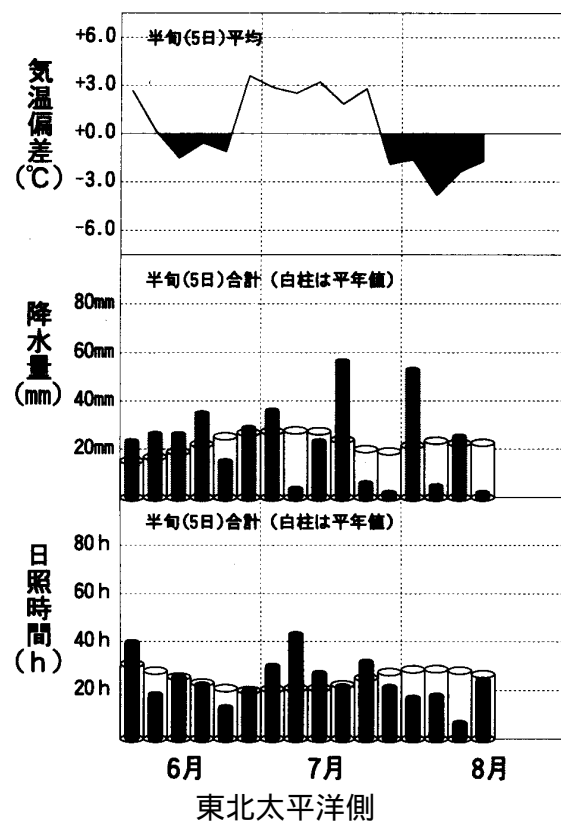
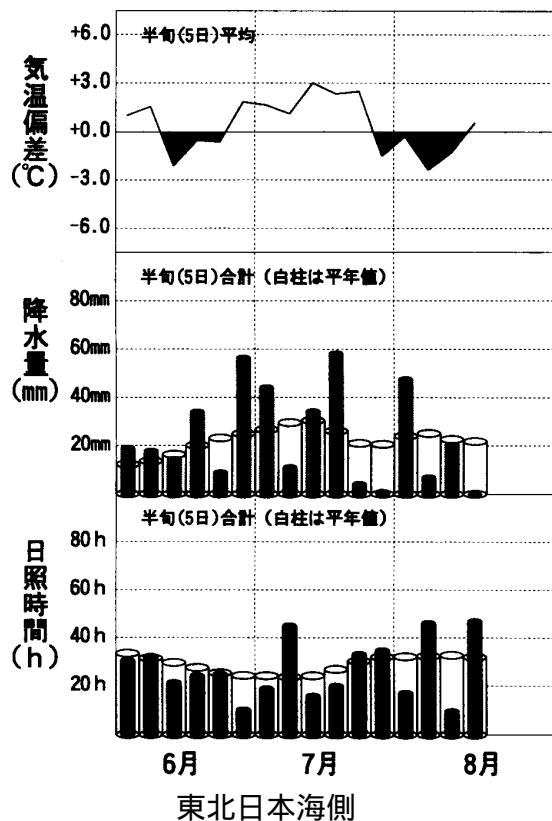
8 月（19 日まで）：この期間の平均気温平年差は、東北日本海側で-1.1 と平年を下回り、東北太平洋側では-2.8 と平年を大きく下回った。降水量平年比は、東北地方で 62%と平年を下回った。日照時間平年比は、東北日本海側で 103%と平年を上回ったが、東北太平洋側では 62%と平年を大きく下回った。

上旬は、1 日に前線の影響で各地で大雨となり、土砂災害や冠水などが相次いだ。その後は、オホーツク海高気圧や日本の東海上を北上した台風第 9 号の影響で冷たく湿った東よりの風が入り、東北太平洋側を中心に曇りや雨のぐずついた天気となって気温がかなり低かったが、東北日本海側では概ね晴れた。9～10 日は、前線を伴った低気圧の影響で雨となるどころが多かった。

上旬の平均気温平年差は、東北日本海側で-1.7 と低く、東北太平洋側で-3.1 とかなり低かった。降水量平年比は、東北地方で 80%と平年並だった。日照時間平年比は、東北日本海側で 88%と平年並、東北太平洋側で 47%と少なかった。

中旬（19 日まで）は、はじめ前線の影響で曇りや雨となった。その後は、北に偏った高気圧やオホーツク海高気圧の影響で、東北太平洋側では朝晩を中心に曇りのところが多かったが、東北日本海側では概ね晴れた。

中旬（19 日まで）の平均気温平年差は、東北日本海側で-0.4 と平年を下回り、東北太平洋側では-2.4 と平年を大きく下回った。降水量平年比は、東北北部で 7%と平年を大きく下回り、東北南部で 63%と平年を下回った。日照時間平年比は、東北日本海側で 118%と平年を上回ったが、東北太平洋側では 78%と平年を下回った。

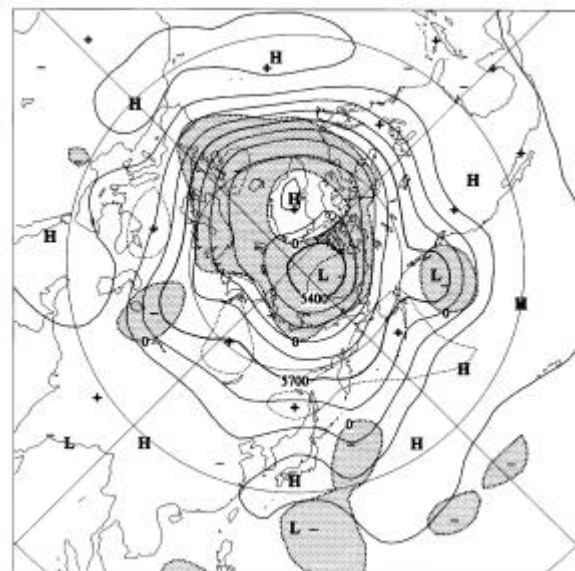


半旬経過図

## (2) 中・高緯度の循環

8月(19日まで): 500hPa 高度場では、日本付近は正偏差で、50~60°N 帯のサハリンからアラスカにかけては強い正偏差が広がる。一方、日本の東海上は谷場となって、南に負偏差が広がる。

太平洋高気圧は東日本から南西諸島を覆い、西日本を中心に猛暑となったが、東北地方はオホーツク海高気圧や日本の東海上を北上した台風第9号の影響で冷たい東よりの風が入り低温となった。



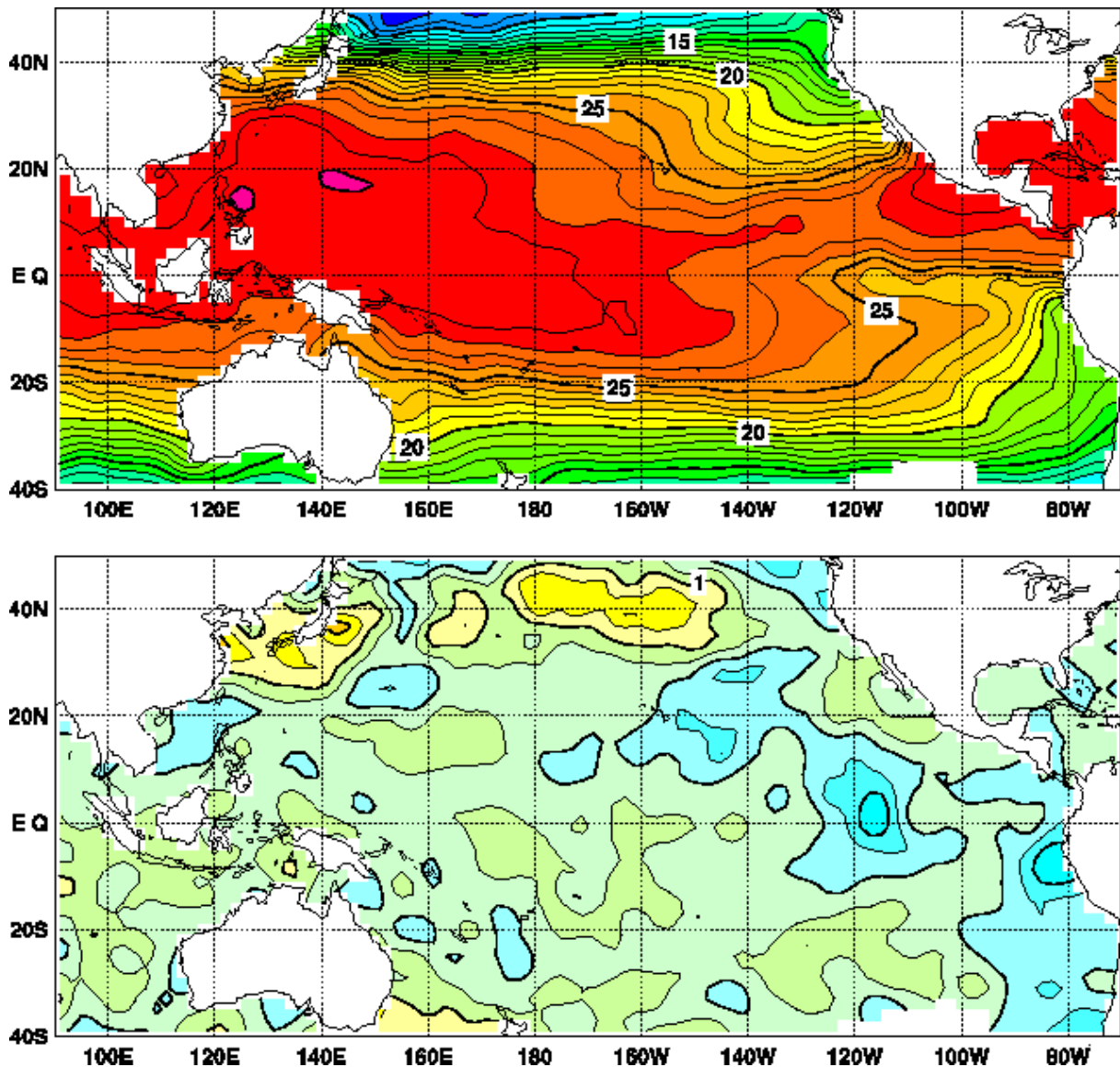
8月1~19日平均 500hPa 天気図  
等高度線間隔 60m  
陰影部は平年より高度が低い領域

### (3) 熱帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の7月の海面水温の基準値（1961～1990年の30年平均値）との差は+0.1℃であった。

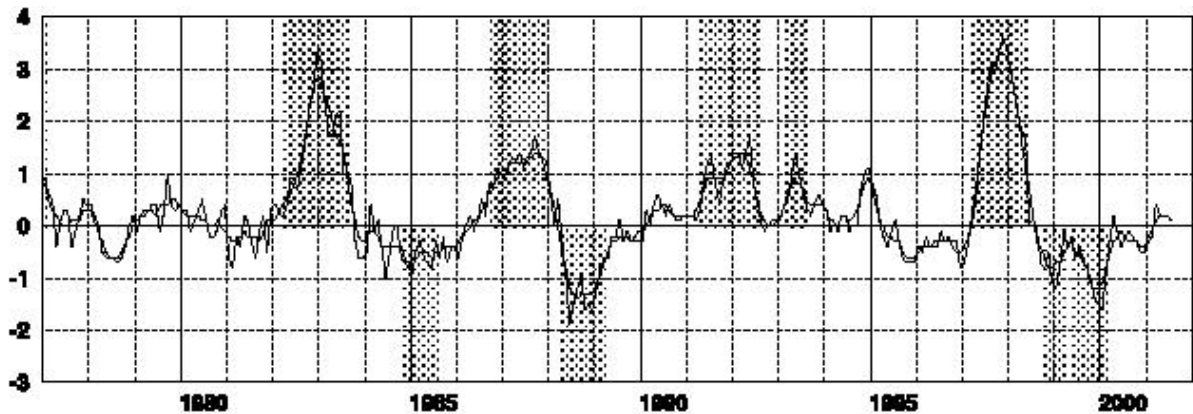
7月の太平洋赤道域の海面水温は、東経130度から東経145度、東経165度から日付変更線付近、西経165度から西経150度、及び西経145度付近で平年より0.5℃以上高かった。一方、西経115度付近では平年より1℃以上低かった（下図）。

7月の南方振動指数は-0.3(暫定値)だった。（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いことを示す。）



2001年7月の海面水温図（上）及び平年偏差図（下）

海面水温図の太線は5℃毎、細線は1℃毎の、平年偏差図の太線は1℃毎、細線は0.5℃毎の等値線を示す。海面水温図の陰影部は28℃以上の領域を、偏差図の濃い（淡い）陰影部は+1℃以上の正偏差域（0℃以下の負偏差域）を示す（平年値は1971～2000年の30年平均値）。



エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差（ ）の推移  
(1977年1月～2001年7月)

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は基準値より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は上側に、ラニーニャ現象の発生期間は下側に、それぞれ陰影を施してある（基準値は1961～90年の30年平均値）。

#### (4) エルニーニョ現象等の今後の見通し（2001年8月～2002年2月）

エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、基準値（1961～1990年の30年平均値）よりやや高い状態で推移するものと予測される。

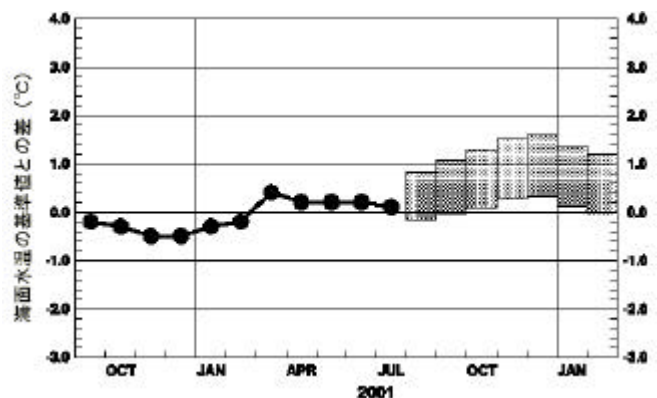
#### 【解説】

エルニーニョ監視海域の7月の海面水温の基準値との差は+0.1であり、春以降大きく変化していない。

海洋の表層（海面から深度数百mまでの領域）では、赤道に沿った海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度・時間断面図に表れているように、7月末には+0.5以上の正偏差が東経160度より西側では見られなくなった。一方、西経150度付近では正偏差が+1.5以上に強まった。このことは、太平洋赤道域の西部にあった表層の暖水域が東に移動したことを示している。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温の基準値との差が年末にかけて徐々に増大すると予測している（右図）。

これらのことから、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差が、今後やや増大し、一時的に+0.5を超えることも予測される。また、上記の海洋表層の暖水域がさらに東に移動する場合には、予測期間中にエルニーニョ現象が発生する可能性が高まるので、今後の推移を注意深く監視する必要がある。



エルニーニョ予測モデルによる  
エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測

この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温（基準値との差）の先月までの推移（折れ線グラフ）とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測（ボックス）を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。（基準値は1961～1990年の30年平均値）